ライプニッツとインドラの網――井本発表に寄せて

先日の井本先生のご発表は示唆に富むものでした。聴きっ放しにするには惜しいので、私の観点から重要な問題と思われるもの、とりわけネットワークとメッシュワークの違いについて、若干ここで考えをまとめておこうと思います。例によってエッセイ風に、あるいはブログ風に考えを書き連ねて行きますので、御用とお急ぎでない方は――

＊ 人類学とライプニッツのシステム

文化人類学については私どもの学生時代は必須科目と言ってよく、西江雅之先生の授業を楽しみにしていました。先年お亡くなりになったのですが、なんの因果か、死の数か月前に深夜の新宿中央郵便局でバッタリ出くわしました。急ぎの郵便の際、都内で受け付けてくれるのはここだけなのです。西江先生はビートたけしとの対談のゲラを急送する必要があるとのことでした。

立ち話でけっこう長く話したのですが、「世界でフランスと完全に同じ場所が数か所ある。どこだと思いますか？」と謎かけされ、「マルティニークですか？」と言ったら、「フランスの人はみんなそう言うんだけど、違うんだなー」とはぐらかされ、結局、正解は教えてもらえず終い。西江先生との問答では何度もそんなことがありました。

（参考before）現地の住民に大歓迎を受けるマクロン。



(参考after）歓迎されすぎて、何だか訳の解らない生き物になってしまったマクロン。



中沢新一の話を聴きに行ったのも、当時かれが宗教人類学という看板を掲げていたから。栗本慎一郎は経済人類学でしたし、当時は何にでも「人類学」がくっ付いていた。

文化人類学は実際には地域の人類学＆民族学で、その手法はもう終わっているとレヴィ=ストロースはすでに『悲しき熱帯』（1955年）で指摘しています。ちなみにこの著作は短い期間に一気に書かれたせいか、非常に読みにくい。ほかの著書はそうでもありません。

ヨーロッパ文明の世界制覇により、地域という概念が成り立たなくなりつつある。未開民族を探訪する人類学者というスタイルはとうに時代遅れのものになった。その限界から彼は出発したと言える。その意味では最後の文化人類学者と見なすことができます。

近年はますますそうで、一方で文化人類学は「人間学」としてサイエンスに近づき、他方で「文化」の概念を拡張することでヨーロッパの知を相対化するのに専念している。当日はすっかり失念していましたが、トム・インゴルドはまさに《線》の生態人類学の提唱者ですね。至るところに《点》ではなく《線》を、いいかえれば関係性を見出そうとする。知らぬ間に次々と新しい著作を出していて、その精力的な執筆ぶりにいささか驚きました。

こうした新しい人類学においては「人間」そのものが相対化されようとしている。「人間の終焉」を説いてセンセーションを引き起こしたのはフーコーでしたが、だからと言って別段かれは新しい人間モデルなり、社会モデルなりを提起したわけではない。あくまで歴史学にすぎず、文献考証学にとどまった。

そうしたヨーロッパの知的状況にあって、ドゥルーズ＝ガタリがリゾームという人間＝社会モデルを提出したことには意味があったと思います。それは植物から出立する。

『創造的進化』も、たしかに植物から出発してはいた。とはいうもののベルクソンの意図はもっぱら《動性》の擁護にあり、植物は動かないが動物は動くという点を強調しました。アリの社会性を乗り越え、動物進化における頂点としての人間的自由の栄光を称える。

この先達の業績を消化しつつドゥルーズ＝ガタリはリゾーム（地下茎）という植物モデルを提案しました。それはデカルトの樹木モデルとは対照的に、人間知性という光（＝啓蒙）の届かない地下で営まれる無意識下のコミュニケーションの形態です。リゾームはなるほど根茎によって地上とも繋がっていますが、ヒモ状の樹状分岐によって地下深くに根を伸ばす。上ではなく、横に伸びる。それは《脳》のモデルとも見なされる。植物的な生成変化が先にあって、その基盤の上に動物が動き始める。ドゥルーズ＝ガタリの哲学はまずもって新たなる自然学と見なされねばなりません。

井本先生の発表を伺いながら、昔ツイッターでやった議論を思い出しました。１０年近く前ホワイトヘッド学会でライプニッツを取り上げた際、ライプニッツのシステムについてツイートしたら、それは大乗仏教の思想「インドラの網」に近いと指摘してくれたフォロワーがいたのです。ところがその方はアカウントを消去してしまったようで、もう名前も思い出せない。生死も定かでない。諸行無常であります。

ただ自分でも極めて重要なテーマだと思っていて、いつかちゃんとまとめようと思っていました。井本発表でその切り口が見つかったような気がします。そこで準公開というかたちで、この場で当時のツイートを再構成してみようと思います。

１０年前のホワイトヘッド学会では、日本のライプニッツ研究を代表するひとり佐々木能章さんを迎え、専門家ならではの発表を聴きました。懇親会で酒を飲みながらあれこれ話を伺い、１夜にして１０年分の進歩があった、めったにない機会でした。

じつは小学校時代、私の最大のライバルはライプニッツだった（笑）子供時代のライプニッツが百科事典を全部読んだというエピソードを子供雑誌で読み、まねしようとして１０頁にして挫折。「オレはダメ人間だ」と、トラウマに……

あいにく、このライプニッツの逸話はウソだったようです。その父親は大学教授でしたが、幼いころ死に別れている。父の蔵書は封印され、読ませて貰えなかった。ようやく許可を得、書庫に入る。ギリシャ語は完全な独学。古典的著作を１０代までに殆ど読み、しかも生涯そらんじていた。人類が生んだ最高の知性の１人には違いありません。

生涯の間に無数の膨大な仕事をした。鉱山監督の仕事で１年の殆どを費やしていた時代があって、その工事現場で主要著作をほとんど書いている。ノヴァーリスもそうですが、ドイツの思想家と鉱山の関係は気になります。近代以前のヨーロッパで鉱物は地下に伸びる植物だと思われていた。

ハノーバー廷の高級官僚として、保険制度の制度設計を主導した。当時、一般の人びとに保険の意義を理解させるのは難しかった。「掛け捨て」など勿体ないと思われてしまう。そうじゃない、得になるのだと数学的に証明した。年金制度の設計にも関わる。どちらの場合も、その傑出した数学能力が駆使されました。確率の重要性についても真っ先に言及している。

そんなライプニッツの思考は根底的に微分法的です。ライプニッツの連続性の観念は微分法から来ている。

モナドロジーがデカルトのコギトをモデルに創案されたのは自明ですが、その個体性・１者性に目を眩まされ、私たちはついモナドをカプセルや箱のように表象してしまう。しかるにライプニッツは、連続性と差異性の問題が集約される場としてモナドを考えていた。モナドは実体のようで、じつは実体ではない。

連続性と差異性（非連続性）を二元論にとどめるなら、それは味方と敵、正義と悪のままで相容れない。両者を和解せんと微分法を導入し、かぎりなく連続性に近いものは畢竟、連続性と見なすべきだというオプティミズムの立場を取った。その象徴がモナドです。

なるほどモナドは時空を統合する実体として描かれますが、そこに映されるのはいかなる特定の時間でも空間でもない。モナドとは実体ではなく、むしろ実体が生起する場所であり、その条件である。この差異の場、差異が無限に増殖する場所をライプニッツの理論はどうしても必要とした。

現代の私たちとしては、デジタルな記号作用を統括する情報のユニットとしてモナドを理解すべきかもしれません。それは出来事として、あるいは現象として現出するが、実体として存続することはない。

ライプニッツの世界には同一なものなど１つも存在しない。すべては異なる。一切は全て別々である。同一律は存在せず、ゆえに実体は存在しない。実体とは突き詰めれば同一律のことである。〈同じ〉ということが言えなければ、実体は存在し得ない。同じように見えるものの背後で一切は流動し、生成変化する。

こうした哲学的立場に立つと〈同じ〉と口にすることが異常に難しくなります。現実世界は同じことの連続でもあるのに、それが簡単に言えない。無理に無理を重ねることになる。自明とも言うべき実体性が見失われる。ベルクソンはそんな倒錯的な事態に陥るのを避けようとしたのだと思われます。素朴な意味での実在性の意義を擁護せんとした。実在を懐疑しているばかりでは前進しようがないからです。

ライプニッツ自身が「窓のない部屋」という比喩を持ち出すので、却ってモナドはアトム的なものと見なされてしまう。横に広がる場所を一所に集約する此処、縦に繋がる時間を一時に集約する現在を想定すると、どうしても立体的なアトム状になる。

立体すなわち実体ですが、むしろモナドはそれとは逆のことを言おうとしている。すべての場所であると同時に、いかなる場所でもなく、すべての時間であると同時に、いかなる時間でもない。そこでは一切の逆説が収斂され、それが外に反射される、あたかもプリズムのごとき命題の場がモナドです。

＊＊ ライプニッツとインドラの網

そんなライプニッツのシステムと、華厳経の「インドラの網」という世界モデルが似ていると、かつてのフォロワーさんに指摘されたのでした。『ブリタニカ国際大百科事典』にはこうあります。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「因陀羅網（いんだらもう）」indrajāla

インドラ神の網。インドで一般に魔術の所産の意。華厳仏教ではインドラ神の宮殿にある網で，結び目に宝玉がつけられ，宝玉同士が互いに映じ合い，それが無限に映じるとして，重重無尽の理論に用いられる。帝網 (たいもう) とも。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

『精選版 日本国語大辞典』で「因陀羅網」は以下のように説明される。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

因陀羅（帝釈天）が住む宮殿を飾る網。無数の結び目の一つ一つに宝珠があり、互いに映じ合って、映じた宝珠が更にまた互いに映じ合うとされるところから、世間の全存在は各々関係しながら、しかも互いに障害となることなく存在していることにたとえる。ことに、華厳宗では諸法の重々無尽であることを、また、真言宗では諸法の円融無碍であることを、これで説明する。帝網。因陀羅珠網(いんだらじゅもう)。

※譬喩尽（1786）一「因多羅網(インダラマウ)梵語」 〔華厳五教章‐一〕

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

注目すべきは、この個所です。「無数の結び目の一つ一つに宝珠があり、互いに映じ合って、映じた宝珠が更にまた互いに映じ合うとされるところから、世間の全存在は各々関係しながら、しかも互いに障害となることなく存在していることにたとえる」。

空海も『十住心論』で因陀羅網を検討しています。１つの宝珠は全ての宝珠を同時に映す。一切世界が１つの宝珠の内に見られる。三千世界は１つの宝珠に収斂されると同時に、１つの宝珠から三千世界が投影される。世界はそんな網目状をしていると空海は見なす。これは真言密教の根底にある発想と言えます。

いいかえれば世界は無数無限のネットワークである。これは縦横に張られたクモの巣のように見なされる。この意味で、世界は《知識》である。この点に思い至ったライプニッツは、縦横自在に自らの知識のネットワークを拡張し続けた。かれの世界は文字で書かれた曼荼羅のようなものです。差異を孕みながら反復をつづける。

これは南方熊楠などと発想が近いように思います。クマグス曼荼羅も明らかに大乗仏教の影響下にある。そもそもライプニッツは１７世紀最大の東洋学者でもあった。中国の情報は宣教師経由で逐一ライプニッツに報告されていた。大乗仏教の中に自らの発想と近いものを認め、それをパクった可能性は捨て切れません。というか、多分そうでしょう。

知識には距離もなく時間もない。人類の知識を一所に集約するコンピューター、あるいは「クラウド」を想定するなら、そこでは一切の情報が一瞬に移される、ないし「映される」と言えます。しかるに問題は、世界の本質は本当に知識か？ということです。知識とはそんな瞬時にして透明に「移される」ものなのか？熊楠の粘菌研究の根底には、そんな深刻な疑念が燻っていたように思われる。

先に引用した『日本国語大辞典』の引用を思い出してください。「世間の全存在は各々関係しながら、しかも互いに障害となることなく存在している」とありました。華厳においても、真言においても、すべての存在が「互いに障害となることなく」調和を保つ有り様を表現するのにインドラの網の喩えを用いている。一切は調和している。それはライプニッツの最善世界のシステムのごときものです。

そこにおいて〈映される〉ものにはベルクソン的な意味での持続がない。交通はあっても交感がない。コミュニケーションには必ず物質性が介在せざるを得ず、そこには障害が、ひいては悪が想定される。情報が透明に伝わることは決してなく、つねに媒介され、ねじ曲げられる。伝言ゲームのように間違いが増幅される。

情報はつねに歪み、偏差を孕む。連続的であると同時に差異的である。ノイズとしての微小表象が至るところに入り込み、鳴り響き、鳴りやまない。この逆説を表現するためにライプニッツはモナドというシステムを練り上げようとしたのだ、と言えなくもありません。微小表象とは悪の萌芽でもあります。しかるに、この意味での悪という問題がオプティミズムの哲学に場所を持つことは遂になかった。

情報が行ったきりになることはない。それは必ず発信者の手元に還ってくる。だからこそネットワークなのです。ところが、そのとき情報は必ずや歪められ、捻じ曲げられている。発信者の意図とは異なるものになっている。というか、発信の意図なるものが発見されるのは、他者を介して情報が還って来てからのことです。自分にはこんな意図があったのだ、と思いがけず気づくのは、移送や転送のあげく送り出した手紙が還ってきてからです。むろん、たんなる誤解にすぎぬ返信も多々あるでしょう。発信者は時に打ちのめされる。むしろそうした回付と回帰のトラブルの中にこそ真の自分との出会いがあると言えなくもない。

むろん誰でもむやみにトラブルに巻き込まれるのは願い下げで、スムーズでスマートな情報の交換があらまほしい。贈与的な情報の循環など、まずもって夢物語のたぐいで、気の好い贈与は無礼を以て返り討ちに遭ったりする。祝宴の席からサン・バルテルミーの虐殺が始まったように。気前のいい贈与者は嫉妬や悪意により復讐される。人類社会においては、むしろその方が常態と見なされねばなりません。見返りのない贈与は共同体に不安定さを招き込む。ゆえに与えるものと受け取るものが一対一の等価と見なされるような交換システムが要請された。それは不可避のことでした。

そんな等価交換システムに基づいてネットワークを捉えるなら、救いがたく倒錯的な錯覚に陥るほかありません。贈与が先行するのは自明です。とはいえ、贈与は必ずや交換システムにより上書きされ、その痕跡を消されてしまう。むしろ、それこそが悪の源泉かもしれない。ひとつの共同体の成立には必ずや黒歴史が伏在する。それは抑圧され、ふたたび顕在化するのを待つ。そうした「負債」こそが等価交換システムを作動させているのです。

他なるものとの交感が可能なのは持続を経、物質や悪の介在を経てのことです。そこには情報の回付性および回帰性が深く関わっている。冗長性の問題も、そこに関与する。ライプニッツの最善世界には、この持続し混線し回帰する時間の問題が存在しない。ライプニッツの哲学はまさに理念的・形而上学的な世界学＆普遍学であるとはいえ、肉身と肉身が複雑に組み合わさった現実世界を説明できない。ヴォルテール『カンディード』はこれを嘲笑いました。

同様のことはインドラの網にも言えそうです。世界の調和は有りうべきものではあっても、決して実現可能なものではない。調和は破られるためにある。因果は必ずや応報により反撃を受け、世界は悪を内包するに至る。インドラの網は、この意味での《業》を振り払うことができない。

情報化時代にライプニッツに注目が集まるのは当然ですが、そこには現代世界の病理も顕われているように思います。人間は肉体を持った生き物です。決してモナドではない。肉体が病むとき情報も病み、人間が死滅するとき情報も消滅する。

ところで先の『十住心論』で「無数の宝珠があるのなら、この眼前の宝珠は要らぬのか？」という問いに空海はこう答えています。この宝珠があるからこそ一切の宝珠が存在する。この宝珠が消えるとき、一切の宝珠が消える、と。これがこれであり、世界が世界であるのは、今この時の肉身のありようと密接に関わっている。こう述べるとき真言は華厳の発想を踏み越えています。私たちは「この宝珠」から出発するほかない。が、それはすでに因果の業により濁っている。むしろ、そんな濁りを引き受けるところに悟達への途がある。

「生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し」というのは空海の有名な言葉ですが、そんな本来的な冥さの中に開けを見出そうとした。ここには華厳にはない屈折と韜晦があり、生の一回性への注視がある。それが空海という仏者を不滅の存在としている。

ホワイトヘッドの術語を用いるなら「主体という形式」こそがインドラの網の結び目となる。それこそが「宝殊」です。結び目＝宝殊は至るところに光り輝いているが、その輝きを見出し、自らの内においても輝かすことができるのは《この私》という主体の形式が構成されることによってのみである。それは実は本来的に暗い営みである。この陰の部分を空海は見ていた。

一切は異なるとライプニッツは見なす。本来なら、そこから身を転じ、一切は同じだという境地に還って来なければならなかった。これを一にして他と言ってもよい。ところが微分法には発散はあっても収斂がない。無際限に近づくが、無限そのものに到達することは決してない。引き伸ばされた死のようなものがモナドロジーの実相です。引き延ばされる死は、かぎりなく希望に似ている。逆説的ではありますが、それこそライプニッツのオプティミスムではなかったか。

以上のようなことをかねて考えていたので、トム・インゴルドの蜘蛛の「メッシュワーク」という発想にガツンとやられたような衝撃を受けました。上で見たように狭義のネットワークには《時間》がない。場所がなく物質性がない。よって自らを省み、正義や悪を判定する倫理性の生じる場がない。ネットワークに《自我》の生まれようがない。

映画『マトリックス』で、仮想世界を支配するのは黒服のエージェント・スミスです。それは世界のあらゆる個体の内側に入り込み、自分と同じ存在に変えてしまう。マトリックスの住人は潜在的にはすべてがエージェント・スミスであり、いざとなると同じ顔、同じ姿に変身して、救世主たるネオ（キアヌ・リーブス）を亡き者にせんと狙う。ネオ自身は自分が救世主だとはどうしても信じられない。その迷いにおいて自我ある存在であり、マトリックスのシステムから免れているのです。

じつはドゥルーズ＝ガタリの自然学においても蜘蛛は特権的な地位にあります。まさにインゴルド的な意味で、知性以前に対象を補足し、対象に巻き込まれつつ環境世界を探求する。まず相手に巻き込まれる。一切はそんな出来事として、もっと言えば「トラブル」として生起する。そこでは主客の区別が意味をなさない。そんな「巻き込まれ」engagementをベルクソンは「持続」と呼んだのです。

ベルクソンの哲学においてアリは特権的な存在です。『創造的進化』はダーウィニズムを大枠で受け容れつつも、ダーウィンにたいするファーブルの批判を真摯に受け止め、限られた時間における急速な進化という問題、いまだに解決されていない難問を解決せんとする。そこに要請されるのが直観の理論ですが、ベルクソン的直観は理性と代替可能な指導原理というべきもので、いささか大仰に過ぎる嫌いがある。

ベルクソンはアリの巣を近代化された社会の暗喩のように捉える。アリは一定の指導原理に従い動いている。この哲学者は、そんな一匹一匹のアリに創意工夫を認めようとはしない。はたしてそうでしょうか。アリもまた個々に自らの問題を解決しながら、その知見を集団知に落とし込みつつ活動しているのではないか。アフォーダンスの理論は、運動の創造性という点で人間と動物を区別しません。ハチの場合このことは自明で、さまざまなコミュニケーション手段を駆使する、その社会的な生態は昔からよく知られています。

アリをモデルにすることの危険にベルクソンは気づかなかった。その途を突き進んだのが社会生物学のエドワード・Ｏ・ウィルソンで、今にして思うと彼もまた彼なりに近代知の克服を目ざしていたのだとよく解ります。その真の意図は理解されぬまま、旧弊の人文学者から激しく攻撃されました。

ところでアリからひとたびクモに目をやると、連中は一匹一匹が個人経営主のようなもので、社会的には活動しない。この点に注目したのがドゥルーズ＝ガタリで、『ミル・プラトー』には他にも様々な生物や昆虫や植物が登場する。その共生関係を社会モデルとして取り上げている。ベルクソン『創造的進化』の着想を大きく拡張しています。

おそらくインゴルド自身がドゥルーズ＝ガタリの優れた読者なのでしょう。で、このような意味での知覚以前の知覚、知性以前の対象把握をホワイトヘッドは「抱握」Prehension と呼ぶ。ハイデガー『存在と時間』における Sorge という発想にも、そんな方向に踏み出そうとする兆しが見えたのは事実です。それは恐らく同時代のマックス・シェーラー、ひいてはベルクソン哲学にライバル意識を持っていたからでしょう。が、すぐに彼は「ハイル・ヒトラー！」と叫びながら「人間」に引き返してしまった。

実際には、人間という概念などもはや何も意味しない情況に今、私たちは立ち至っています。２０世紀の先鋭な思想家たちは、自分らが転換期にあることを鋭敏に気づいていました。ところが今世紀の哲学者たちは相も変わらずハイデガーだとか、カントだ、ヘーゲルだ、マルクスだと言うばかりで、新しい状況に何ら対処しようとしていない。却って古めかしい人間概念に引き返し、引きこもって、文明の前進を妨げている。その意味で、いまや哲学こそが人類の敵だと言えなくもありません。

このようなガラパゴス的な状況下で、境界を旅する人としての人類学が新たな意味を持ちつつあるのは確かなことだと思われます。

＊＊＊ 迦陵頻伽の声を聴く――宮沢賢治「インドラの網」

ところで先日こんな夢を見ました。荒涼とした未来都市で、自分らは高校生グループです。電車を乗り継ぎながら目的地に向かっている。何者かに追われていて、捕まると線路際に引き据えられ、「お前はライプニッツ派だな？」と詰問される。恐怖からそうだと認めると、魂を吸われ、朽ち果てて死ぬ。

目が覚めてしまったので、ネットの青空文庫で宮沢賢治「インドラの網」を読みました。https://aozora.gr.jp/cards/000081/files/460\_42328.html

これは詩とも短編小説ともつかぬ不思議な文章です。が、思うに宮沢賢治が遺した最も深遠な作品だと思います。

冒頭で語り手は自分が風と草穂の底に疲れて倒れているのを見る。それは過去のこととして回想される。その後かれは「ツェラ高原」なるものを歩いて行く。それは気圏のはるか上、「きんきん痛む空気の中」です。なぜ自分はこんな処を歩いているのかと彼は自問します。

その空気の希薄な高原で、語り手は天人の飛翔を目にする。かれは自分が我知らずツェラ高原の空間から天の空間へ足を踏み入れたと知り、胸を躍らせる。

天人はまっすぐに宙を翔ける。一瞬百由旬を飛んでいるのに、少しも動かず移らない。「ここではあらゆる望みがみんな浄められている。願いの数はみな寂（しず）められている。重力は互（たがい）に打ち消され冷たいまるめろの匂いが浮動するばかりだ。だからあの天衣の紐も波立たずまた鉛直に垂れないのだ」と主人公は思います。そして、この天の空間がはるか上にあるのではなく、自分の感覚のすぐ隣りにあると感じる。

そのとき彼は眼前に三人の天の子供を見ます。かれらは私の前の水際に立って、東の空に太陽が昇るのを待っている。やがて太陽が顕われ、３人は合掌します。それは天の世界の太陽です。子供たちは夢中になって湖の岸辺を駆け回る。いきなり私にぶつかってきて、そのうちのひとりが空を指さして叫ぶ。インドラの網を見よ、と。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

「ごらん、そら、インドラの網を。」

　私は空を見ました。いまはすっかり青ぞらに変ったその天頂から四方の青白い天末までいちめんはられたインドラのスペクトル製の網、その繊維は蜘蛛のより細く、その組織は菌糸より緻密に、透明清澄で黄金でまた青く幾億互に交錯し光って顫えて燃えました。

「ごらん、そら、風の太鼓。」も一人がぶっつかってあわてて遁げながら斯う云いました。ほんとうに空のところどころマイナスの太陽ともいうように暗く藍や黄金や緑や灰いろに光り空から陥ちこんだようになり誰も敲かないのにちからいっぱい鳴っている、百千のその天の太鼓は鳴っていながらそれで少しも鳴っていなかったのです。私はそれをあんまり永く見て眼も眩くなりよろよろしました。

「ごらん、蒼孔雀を。」さっきの右はじの子供が私と行きすぎるときしずかに斯う云いました。まことに空のインドラの網のむこう、数しらず鳴りわたる天鼓のかなたに空一ぱいの不思議な大きな蒼い孔雀が宝石製の尾ばねをひろげかすかにクウクウ鳴きました。その孔雀はたしかに空には居りました。けれども少しも見えなかったのです。たしかに鳴いておりました。けれども少しも聞えなかったのです。

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞

それっきりもう語り手は３人の子供を見ることはありません。最初と同じく自分が風と草穂の中に倒れている。その白く倒れている「私のかたち」をぼんやり思い出した。それが最後の一文です。おそらく私は自分の《死体》を外から眺め、その「かたち」を思い出しているのです。別の言い方をすれば自分という形式の死を外から眺めているのです。

この天の高原で私が３人の子供に逢うのは象徴的です。最初の子は「インドラの網」を指さします。それは視覚イメージの極限です。その繊維は蜘蛛の糸よりも細く、その組織は菌糸より緻密で、金や青に光り、無数無限に交錯し合い、顫えて燃えるようである。

次の子が注意を呼び掛けるのは「風の太鼓」です。それは聴覚イメージの極致です。空のところどころに「マイナス」の、すなわち目には見えない太陽が広がり、この百千の天の太鼓は誰も敲かないのに力いっぱい鳴っている。なのに音はしない。実際には音ではなく、音以前の響き、あるいは「音象徴」と形容すべきかもしれません。

最後に３人目の子供が「蒼孔雀を見よ」と言います。その鳥はインドラの網の向こうにいて、数知れず鳴りわたる天鼓の彼方で鳴く。この宝石製の尾羽をひろげ鳴く鳥、確かに空にいるのに目には見えない鳥。これはまさしく迦陵頻伽（かりょうびんが）の極楽鳥でしょう。

「その孔雀はたしかに空には居りました。けれども少しも見えなかったのです。たしかに鳴いておりました。けれども少しも聞えなかったのです」。真実在とはそこに居るもの、にもかかわらず目には見えぬもの、音に聴こえぬものだと作者は強調する。

その鳴き声からインドラの網が広がり顫える。それは視覚イメージの源泉です。又その鳴き声から天の太鼓が鳴り渡る。それは聴覚イメージの源です。この小編で宮沢賢治は人間の知覚と認識の始原とその極限を描いているのです。むろんその根底には華厳経の教えがあるのでしょう。

私が思うにライプニッツやドゥルーズのような西洋の思想家は、あまりに視覚イメージ、もっと言えば言語に囚われている。視覚イメージの根底には聴覚イメージが鳴り響いている。そのもっと根底に、視覚にも聴覚にも捉えようがない響きが鳴り渡っている。それは言語や表象には表現しがたい。東洋の思想家、とりわけ空海は「万象に響きあり」という地平から出発する。視覚や聴覚の根底、一切の有りと有るものの根底に迦陵頻伽の澄明な一声がある。そこから一切が立ち上がってくる。そして、そこへと一切が収斂するのです。

ただこれらの委細が大乗仏教の門を叩けば詳らかになるとは私は信じません。西洋哲学の概念形成力、認知科学の実証性は端倪すべからざるものであり、可能なかぎり明晰に、かつ説得的に言明する義務を現代の哲学は担っている。

とはいえ、それによっては語り得ないものが残りつづけるのは事実でしょう。それを語るものこそが文体であり、表現のスタイルではないでしょうか。それは真理そのものというより、真理の響きを伝えるものです。その媒体が書物である必要など、そもそも無いのかもしれません。音楽でも絵画でも映画でもいい。却って書物という形態自体が真理を語るのに適していない、という事実がいよいよ誰の目にもはっきりしてきた。人間の終焉の時代とは、書物が終わる時代でもあるでしょう。と同時に、書物でしか語り得ないことがいよいよ明白になる時代でもあるでしょう。

宮沢賢治は驚嘆すべき表現者でした。「インドラの網」に読まれるような華厳の深遠な理解者であると同時に、現世の悪と対峙する物語作家でもあった。とまれ、日本語の富には汲みつくしがたい奥深さがあることを最後に強調しておきたいと思います。（2021/08/02）